

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(24)

——第226号から第235号——

門 田 俊 夫

第226号 1711年11月19日（月曜日）

【スティーラー】

絵画は物言わぬ詩だ。（ホラティウス）¹⁾

私はこれまでの思索においてことあるたびに、絵画がマナーの向上に活用されていないことを嘆き悲しんできました²⁾。モデルとなる人物の所作が想像できないほど調和的に表現されているということ、そして絵画はモデルのありのままの情念や屈託が表現されるだけでなく、その造作の背景に画家の想像力がいかんなく発揮されていると考えますと、絵筆の仕事から美德と人間性に対する非常に強烈なイメージが伝わってくるのです。これはまさに、著作を読む能力がなくても、また時間も要さずに理解できる詩と言えます。ところが、一般に絵画の活用は歪められ、その実に見事な技はこのうえなく卑劣で取るに足らない目的のために供されているのです。このうえなく美しいヴィーナス、精巧に制作されたバッコス、眠っているキューピッドや物悲しいニンフの姿、あるいは、神々、女神、半神半人、サテュロス、ポリュペーモス、スフィンクス、ファウヌスなどの像をどう見ればよいのか。かりに、画家の手によって、こういった図案の中に表現しようとする美德や悪徳が賞賛に足るあるいは恥ずべきものと感じられるほど巧みに私たちの目に映るとしたら、私たちは教育的な講義を受けなくても立派な歴史的な作品を見ていることになるのだと思います。このことが真実であることを証明するには、ハンプトンコート女王陛下の画廊にある下絵（カルトン）を目にしたことがある人々の証言をあげれば十分でしょう。この下絵とは救世主と十二使徒の行いを描いたものにほかなりません³⁾。今、敬服に値するラ

1) ホラティウス『ヘレニウムによる修辞学』4.28.39 これは元々キケロの改作。

2) 第172号、第142号参照。

3) 元々はローマ法王レオ10世がシステリーナ礼拝堂に飾るためにラファエロに依頼した七枚のタペストリー。その後、タペストリーのお手本としてブリュッセルに移管されていたが、それをジェイムズ1世が購入した。ハンプトンコートがサー・クリストファー・レンによって再建されたとき、この使徒行伝のカルトン（原寸大の下絵）が回廊に飾られた。それをスティーラーが見たのである。1865年以降は、ヴィクトリア・アルバート博物館に所蔵されている。

ファエロが描き出した暖かみのある画像を思い起こして見ますと、2年以上も前のかすかな記憶なのですが、欲得ずくの男が倒れて息絶えたとき、一同に伺える恐怖と崇敬の念に、また、生まれながらの盲人がはじめて光を目にしたときのその人物の驚きに、そしてまた、盲目にされたときの神に見放された魔術師の憤怒に感動せざるを得ません⁴⁾。足に力が甦った足萎えの男はそのことに怪訝な表情を浮かべて立ちすくみます。荘厳な使徒たちは彼らが救済する疾患を心から意識しながら行動しているようですが、弱者に施しを行っている自分たちのことは度外視しています。彼らには自分たちが単なる道具であることが分かっています。神の誉れが差し伸べられるときの彼らの気高い悲しみの表情は、聖性を実に絶妙に描写したものとなっています。聖パウロがアテネの人たちに説教をしているとき、この気位の高い聴衆たちのさまざまな気質を実に巧みに描写しているのです。語られることをすべて軽々しく信じ込む人もいれば、深い不安に包まれる人やパウロの言うことには何か根拠があるのだと言っている人やパウロは自分たちのこれまでの信念を破壊しようとしているのだと腹を立てている人や全面的に納得して恍惚とした表情で手を差し伸べている人もいます。その一方で、大半の人たちはこの集会の主だった人たちの意見を知りたがっているのです。イエス復活後の姿を描いた絵については言及しません⁵⁾。イエスの神々しい容貌から、現在の威光、先の受難、謙遜や威厳、横暴な指令や神の愛が同時に伝わってきます。使徒11人全員には同様に賞賛の気持ちがありますが、人によって異なっています。ペテロは賞賛と思いやりの気持ちを込めて跪いて主の命令を受け止めます。隣の二人はなおも神の存在に対する畏怖の念に縛られていますが、もっと恍惚とした表情をあらわにして受け止めます。右側に描かれている最愛の使徒は大きな愛に包まれて驚きの表情を浮かべています。そして、聴衆に背を向け、イエスに対しては半身に構えている最後の人物が聖トマスと考えられますが、この人はそれまでのおどおどとした態度を意識してきまり悪がっているのです。ラファエロはこういった当惑を描写することは極めて困難な仕事であると考えたのでしょうか、彼はその困難さを承知の上で描いたのです。

このカルトンはラファエロが敬虔な気持ちを渾身の力を込めて描いたものであり、一筆一筆に伺える敬虔な心は、おそらくこの上なく感動的な雄弁よりもはるかに力強く表現されています。非常に貴重なこの作品は、当然なことですが、最も偉大で最も敬虔な女王陛下の所有となっており、誰もがいつでも自由に観ることはできません。だが、彫刻師と画家の関係が印刷工と著者の関係と同じであるように、有難いことに、女王陛下が高潔なドーリーニー氏にラファエロのこの作品の公表を奨励されました⁶⁾。この紳士の手による「復活」の作品がありますが、この作品は誰にも劣らないものと私は考えています。

4) このカルトンの主題はつぎの通り：(1)キリストによるペテロへの告諭 (2)奇跡的な大漁 (3)アナニアの死 (4)足の治癒 (5)エリスマの失明 (6)ルステラでの犠牲 (7)パウロのアテネでの説教

5) スティール『ガーディアン』21号。

6) ニコラス・ドーリーニー (1658-1746) は画家マイケル・ドーリーニーの息子で、1711年にイングランドにやって来て、ハンプトンコートに部屋が与えられた。助手二人とカルトンを版画にした。1719年、2セットを国王に献呈。翌年、ジョージ1世から爵位を与えられる。

それなりの地位についている人たちが名も功績もない外国人に寛大な心を示しながらも、わずかな予約金を申し出る機会を見逃すようでしたら、馬鹿げたことだと思われます。この作品は物の価値が分かる人が見れば必ず、この上なく気高い気持ちになり、愛と賞賛、同情と現世に対する恥辱、さらにはより善きものへの期待といったものが吹き込まれるに違いありません。

一般には美点が伴うものですが、謙虚につましく私たちのために力を注いでくれる優秀な外国人を顕著な存在にさせてあげることは、国のためにも大きな誉れとなるのは確かなところudur。このような機会は看過すべきではありません。振舞いが謙虚だからといって、これだけの資質を備えた人物を不利な立場に追いやって優れたものを失ってしまってはなりません。絵画に対する情熱によって示されるものではないのですが、私の絵画への鑑識眼はたいしたことではありませんので、風景画とか建物の絵とか人物画といった画家の仕事について語ろうとするときにはとても当惑します。このため、つぎの水曜日にシャンドイス・ストリートで催されるボウル氏のオークションに出品される作品について、何と言ったらよいのか分かりません。だが、私としましては、これまでボウル氏から購入した人々たちから彼の取引の誠実さをほめられているとの話を聞いたこともあり、また、彼自身も賞賛に足る画家でありながら、自分の作品はオークションの部屋に置くに値しないと言っているのを漏れ聞いていますので、彼のオークションについて触れないのはお金持ちの人々のためにはならないのではと危惧した次第です⁷⁾。

広告：「イタリアから当代きっての画家と自認する人物が来訪。わが国においても、その名を轟かさんとの意気込みなり。」医師は貧しきものには無料で薬を塗布する。

第227号 1711年11月20日（火曜日）

【アディソン】

ああ！ 私はどうなるのか。惨めな私は。あなたには私の声が聞こえないのか。私は衣服を剥ぎ取り、オルフィスの漁師たちが行き交うあの海に飛び込むのだ。命は助かるが、私には分かっている、あなたが喜ぶということが。(テオクリトス)¹⁾

先週木曜日の紙面にて「恋人飛び込み岬」について言及しました。どうやら寄稿者の中にこれに大きな好奇心を抱いた方がいらっしゃるようです。この飛び込みが行われた場所

7) オークションの広告は3日前にデイリー・クーラント紙に載った：11月21日水曜日、最近入荷した巨匠たちの原画を販売。場所はコヴェント・ガーデン、シャンドイス・ストリート、スリータンタヴェンの隣、画家ボウルズ宅。原画は翌週月曜日と火曜日にも展示。カタログは同所ならびにコヴェント・ガーデン、ハーフムーンの版画商クーパーにて入手可。

ハズリットは随筆「タトラーについて」で本号を最高の批評と評した。

1) テオクリトス (310?-2250 B.C.) 『田園詩』 3.24-27

はレフカスという所だったのだとお知らせしました²⁾。このレフカスという場所は、かつてはアルカナニアの一部で、陸続きだったのですが、時代の経過と共に海水によって浸食され、現在では陸とは分離され、イオニア海に浮かぶ小さな島となっています。恋人たちが飛び込むこの島の岬は、かつてはレフカーテと呼ばれていました。読者がこの島と岬を現在確認したいのであれば、古のレフカスという島はセント・モーロとなっており、レフカーテ岬はセント・モーロ岬と記されています。

以上古代のお話をしてきましたので、本紙の冒頭に取り上げていますモットーでテオクリトスは絶望に駆られたある羊飼いが恋人への想いをつぎのように語っているのだと述べておかななくてはなりません。「ああ！ 私はどうなるのか。惨めな私は。あなたには私の声が聞こえないのか。私は衣服を剥ぎ取り、オルフィスの漁師たちが行き交うあの海に飛び込むのだ。命は助かるが、私には分かっている、あなたが喜ぶということが。」この羊飼いが指定している場所が上述のレフカーテだったのか、それともどこか別の場所の恋人飛び込み岬だったのかはその判断は批評家の皆さんにお任せしたいと考えます。いずれにしても同様の効果をもたらしたものと思えます。私としましては、解釈をなさる皆さんと同様に、この羊飼いは命が助かれれば恋人が喜ぶと付け加えて自らの投身を疑っているの、彼が溺死を心から望んでいたとは信じることはできません。私たちの解釈によれば、この恋人は非常に煩わしい存在の羊飼いを厄介払いできれば喜ばしいのです。

前置きはこれくらいにしまして、読者のみなさんには私の元に寄せられましたこのテーマについて書かれている手紙を何通か紹介したいと思います。最初の手紙はある医師から寄せられたものです。

拝啓

貴殿が第223号で述べられている恋人の飛び込みは、私が思いますに、一般に恋だけでなくその他あらゆる悪にとってきわめて効果的な治療法なのです。要するに、あの飛び込みはヘーローがレアンドロスへの恋情を断ち切るために海に身を投じたのに匹敵するのではと思えます³⁾。男は悲嘆に暮れる危険性はありません。彼はそれを防ぐために身を滅ぼすのです。私は古代の著者たちがこの飛び込みに関して述べる奇跡のこと、特に、飛び込んだ非常に多くの人々がたいした傷も負わずに助かったのだということを十分承知しています。もしこうすることで恋のくびきから自由になるのだとすれば、これはひとつには貴殿があげられています理由のせいなのですが、恋人たちが飛び込む冷水はまた彼らの治療にいくらか寄与しているのだと考えられるのではありませんか⁴⁾。海に飛び込むこと、つまり塩水の中につかることによって、精神はしばしば新たな動きが与えられ、血の巡りも変わってくるのです。そこで私たち医師は薬の効かない心身の病にはこの処方をするので

2) レフカスはアカルナニア（古代ギリシア西海岸沿いのイオニア海に臨む地域）の半島の突端だったが、コリント人が海洋運河を作ったとき、島となった。

3) オウィディウス『名婦の書簡』18, 19

4) サー・ジョン・フロイヤーが『イングランドにおける温浴、水風呂の功罪』（1697年）を出版してから、水風呂の効用について関心が寄せられていた。

す。私は非常に尊い著者から引用することができます。この著者は恋が引き起こした狂乱を狂犬に咬まれて引き起こされる狂乱に喩えているのです。ところで、この喩えは貴紙にとっては少々粗雑ですし、この著者を冷やかしているようにも思えますので、私としましては、匂わすだけに止めて、もしこういった二つの異なった原因によって引き起こされる狂乱が同質のものであるとしたら、同じ手段でもってうまく治癒することができるかどうかの判断は貴殿に考えていただくことにしたいと思います。

敬具

貴殿に好意を寄せるエスキュラピウス

拝啓

私は恋に苦しむ娘です。私の恋にまつわる顛末は長くて物悲しいものです。その一端を披露しますと、ある若い殿方が私に3年に渡って言い寄ってきたのです。そこで、私の頭の中は幸せな夢で一杯になったのです。そしてつい最近彼は別人と結婚してしまったのです。どうか、貴方がおっしゃる岬、そうです恋人飛び込み岬の所在地をお教え願えないでしょうか。そしてそこへは陸路で行けるのかどうかお教えください。でもその岬には功德がないのではと懸念していますし、また、現代の女にはそのような投身はウェヌスへの賛歌を歌うのと同じくらいに安らぎは得られないではないかとも懸念している次第です。という訳で、私はドライデンのウェルギリウスに登場するディードーと共に「ああ！ 残酷な神よ、恋の苦しみを癒してはくださらなかった」⁵⁾と歌うしかないのです。

敬具

わびしいアテネイス

拝啓

僕の胸中はグウィニフリッド夫人への恋心で一杯です⁶⁾。そして、彼女はとても気難しく僕に痾癢をぶっつけてきますので、もし(曾祖父が丘のふもとに建てたものだけど)我が家が運良く恋人飛び込み岬から20マイルたらずのところにあれば、僕は本当に飛び込んで首の骨を折ってしまいたいくらいなのです。さてさて大いなるブリテンの観察者様である貴方様はご存知のことと思いますが、カナーヴォンシャーにはウェールズを代表するペンマンモーという名のとても高い山があります⁷⁾。貴方様にはこれもまた知っていただきたいのですが、僕からすればこの山に登るくらいたいしたことはないのです。でも、山道は石ころだらけで靴にはよくありません。この山の前面には、(教区教会の尖塔のような)大きな岩がありまして海に大きくせり出しているのです。そこで、塞ぎこむと、そこから飛び込むのです。僕の親友である貴方様には、僕の恋の病が治るかどうか貴方様の新聞に書いていただきたいのです。というのは、ガラスのように透明で、ネギのように緑の海があるのです。それから同様に、僕が溺れて、首の骨を折るのか、グウィニフリッド夫人は以後僕を捨てるのかどうか教えてください。どうか早く答えを出してください

5) これは『アイネーイス』からではなく、ドライデンのウェルギリウス『牧歌』第2,100行の翻訳。

6) グウィニフリッド夫人の返事は、リリーに登場。

7) カナーヴォンシャーのペンマンモー山は標高1550フィート。

い。僕はとても急いでいますし、時間を粗末にたくありませんので。真心を込めて貴方様のいとおしい友より。

デイヴィス
シェンキンにて

追伸：訴訟でロンドンに出てきたが、負けてしまいました。そこで霜が降りはじめないうちに田舎に帰り飛び込む決心をしました。なぜって、風邪を引きそうなのですから。

おそらく、恋に対しては理に適った助言よりもひやかしのほうが効果的だと思います。途方もない恋情を治癒するためには、ヒューディブラスやドンキホーテは古代の哲学者たちに変わらないくらい有効だと、私は考えています。そこで、学識ある友人が送ってくれたギリシア語のささやか写本の翻訳を急いで公表したいと思います⁸⁾。この写本はレフカーテ岬の小さなアポロ神殿に保管されていた記録の一部だったようです。読者の皆さんはこれが飛び込もうとした何名かについての概要であることに気づかれることでしょう。この写本にはある種の時代錯誤と古代の正字法からの逸脱があるように思えますので、私としましては、これはあのギリシアの詭弁家の誰かが書いたものではなく、本物なのだと得心しているわけではありません。もっとも、詭弁家たちは世間にこの種の偽作をいろいろ押し付けていますが。私は用心してこう言っているのです。なぜなら、私が重要な事柄で間違いをしますと、必ず私の無知を暴き出してくれる並外れた知識を持った筆者が何名かいることを承知しているからです。

シー

第228号 1711年11月21日（水曜日）

【スティール】

詮索好きな人を解き放つと、彼らはまた口を開き、
あなたの言ったことを喋るだろう。(ホラティウス)¹⁾

日常的な事柄にはそれなりに礼節をわきまえた振る舞いをし、語られることに対してはそれなりの理解力を持ちながらも、生まれつき思考力を欠き、したがって、なじみのないことにも無理やり口を差し挟もうとする口から先に生まれたような人がいます。こういうタイプの人にはまさに詮索好きと言えます。お気づきのことも知れませんが、こういった人は自分が熟知していることに関しては誰にも負けにくい良識のある喋り方をしますが、自分の守備範囲を守ることが出来ずにつぎからつぎへと新しいことに首を突っ込んでしまうのです。ですから、彼が礼儀正しい会話にふさわしい人だと分かっているにもかかわらず、騎手

8) 第233号参照。

1) ホラティウス『書簡詩』1.18.69

のかたわらで満面の笑みを浮かべて馬にどんな薬を飲ませたか、そしてその薬がいかに合ったか、そして、その後胃の調子が回復し運動に取り掛かったかといった馬の健康状態を取り戻すために実施した大改革の解説をしている彼の姿を見かけることになります。彼はあたかもあなたから最重要な真理を語られているかのように満足するわけです。この気性はからかいの対象にはさせますが、どうみても人を幸せにすることはありません。なぜなら、こういった人物は一般に、自分と似たような人物、つまり、おしゃべり屋さんと気が合うからです。非常にうまくできているものでして、双方には、異性の集まりでおなじみの、お互いの不足を補うためのひそかな好みがあります。先日、私はあるラウンジに腰を掛けていましたところ、満足げな面持ちでおしゃべり屋さんが近づいてくるのを見ている詮索好きな人を目にする光栄に浴しました。すぐにでも話しかけようとするこの人物が彼のそばに着席しました。そして頭をなで、腕にもたれかかり、不安な表情を浮かべて話し始めました。「今日は変わったことは何もありません。これといったことは何もないのですが、夕べは眠れませんでした。風邪かなとも思うのですが、この気候でこの靴では薄すぎるのではと思います。この一週間ずっと咳き込んでいるのですよ。そうであるに違いありません。だって、私は冬も夏もいつだって冷水で頭髪を洗いますので、季節は関係ないのです²⁾。したがって、きっと足元に忍び込んだに違いありません。でも私は足元に忍び込もうがどうかそんなことは無視しているのです。嫌なことの大半は敏感すぎるために起こるものです。本来、顔というものは他の箇所に比べて寒さに強いのです。インディアンはどうして裸でいることができるのかと尋ねたヨーロッパ人に「私は全身顔でできているのです」と巧みな返答をしたのです。」³⁾

私はこの話はほかのもっと重要な事柄と同様に、探求者一般にとって歓迎すべきものだと思います。我が話し手のこの探求者は別の場所から声がかかったとき、彼のそばから離れた某氏はかつて毎朝頭髪を冷水で洗い、ほぼ一言一句間違いに言われた通りのことを口にしていたのだと隣の人物に語り掛けたのです。実は詮索好きな人は会話の漏斗という次第です。彼らは何事も自分のものにするのではなく、ただ単につきの人に引き継ぐだけなのです。彼らは町で語られる善悪すべてを伝達する仲介者なのです。彼らに腹を立てるあるいは彼らの振舞いに苦しんでいると考えている人たちはその迷惑な事態を好転させることができます。なぜなら、彼らには悪意はありませんし、あなたが彼らの代役をつとめれば、以前に彼らが口にしたことに反駁することができるからです。ある事柄についてさらに詳しく説明をすれば、それは彼らが手にすることができるこのうえなく有難いこととなるのです。彼らはそれ以上うるさくなることは稀で、せいぜい、町ではそういうことなのだろうとかある事情通から情報を手に入れたのだと言うくらいがおちなのです。その結

2) 第227号参照。

3) カムデンが『ブリテンに関わる遺物』(1674年)で語っている有名な話。モンテーニュも随筆「衣服を着用する習慣について」でこれに触れている。また、アディソンもガーディアン102号にて、「凍結するような地方の住民は裸でいるのは可能なのかと尋ねられたスキタイ人が「すべて顔だから大丈夫」と答えた。」と記している。

果、町にはそれ以上に詳しいことを知る余地がありますし、事情通が言ったことに反駁できるさらにそれ以上の事情通がいるということです。

この気質に関して、ぶらぶらしている息子のことを熱心に言い訳しているある父親の気質ほど滑稽なものを私は知りません。たとえそれがあゝの意味では全く取るに足らないものであるにしても、父親が期待を込めてそういつている姿を目にすることほど楽しいものはありません。こういった気質は、それを聞いている第三者にとって完全に不穏当というわけではなく、それ自体どうでもいいことを言っているときには非常に愉快なものとなります。先日、身なりの良い若者とその同類の紳士二人が、早速、家系について話し始めたのです。小耳に挟んだところでは、叔母のことを喋っているようでした。母方の叔母のことでした。つぎに、さらに声を落として父親の鬢は大体黒なのだと語ります。それに対してそんなことはないと応えます。この紳士は相当高いヒールの靴を履いているのです。

私の考えでは、詮索好きな人はひとえに想像力が欠如していますので、内緒ごとを伝えることほど危険なことはないと思います。なぜなら、詮索好きな人には知りたいという気質がありますので、一度聞いてしまうとそれを誰かに伝えなくてはならなくなるからです。詮索好きな人と話をしても、すべてをさらけ出す必要はありません。なぜなら、彼らは重要でないことにも満足するからです。話す材料が十分にある場合は、それが何であれ、彼らの新聞の最後は、単なる間投詞的な表現ではなく、「これは確認の必要がある。これはさまざまな思索の機会を提供する。時が解決してくれるだろう」といったことになります。

時折、この気質には、社会にとっての有益性といったことには目を向けず、ただ単に自分の気晴らしのためだけに事の次第を知りたいという飽くなき欲求が伴っていることに気づくかもしれません。こういったことで満たされる心というものは、面白おかしいことに順応し、社会のことに無頓着な人に形作られることになります。私同様、たんなる観察者にすぎないのです。悪意あるいは私欲のないこの好奇心は、想像力に情況の宝庫を蓄え、会話の中で結実することになります。社会的地位の最も高い人々から最下層の召使までそれぞれの悪巧みや感情や楽しみを知ることができれば、そこに共通する茶番を享受することになり、このことは想像できないほどの楽しみを提供してくれることになります。それは彼らの秘密の考えと人前での振舞いが、ナイトキャップや長い鬢と同様に、人によって大きく異なっていることを観察することになるのです。

拝啓

ブルタルコスによると、ローマ人ガイウス・グラックスはしばしば激情に駆られて大変な大声で荒々しく喋りだし、声をあまりにも振り絞り過ぎたために、話を続けることができなかったということです⁴⁾。この行き過ぎを矯正するために、彼はリキニウスという聡

4) ブルタルコス「ティベリウス・グラックス伝」2.5 ガイウスとティベリウスは兄弟。ティベリウスは温和で落ち着きがあったが、一方のガイウスは激しい気性であったとのこと。

明な従者を従えていました。リキニウスはいつも主人の声を調整するために調子笛という器具を持って彼に付き従っていたのです。彼は主人の声が高くなり始めるといつも直ちに低い音を鳴らしたのです。これでガイウスはすぐに声の調子を落とし冷静になったということです。

この話を思い出しますと、私はしばしばこの有益な器具が長い間使用されずにきたことを不思議に思ってしまう。リキニウスの見事な役目は長年に渡って心に留められているのですからことさらそう思うわけです。これは人々のためではないにしても、自分自身のために是非とも誰かに復活してもらいたいと、私は考えます。声高のお喋り屋さんは自分の発する騒音を気に入っていますので、召使から抑制されたくはないのだという異議がでるかもしれません。だが、それはその通りだと認めましても、聞き手側の人にはきっと自己防衛のために、静かな調べを鳴らしていいごく正当な権利があります。要するに、リキニウスは現れず、騒音はかまびすしくなりましたので、私は先だっの長い休暇は田舎に引きこもることにしました。そしてこのところ（王立協会で働いている）ある聡明な芸術家の助けを借りて、やっと私の構想の完成に近づいたところです。間もなくみなさんにコーヒーハウスであるいは個人的な使用のために携帯する気に入った器具を提供する準備が整うものと思います。一方、この器具に気を悪くする恐れのある知り合いの紳士数名には、あらかじめ配慮して「リキニウスのような人物を従えなさい」とのみ記した私信で通知しておきたいと思います。

これ以上貴殿に厄介をかけたたくありませんが、どうかこの笛をひとつお受け取りいただきたいと思います。笛はバックリーに預けたいと思います。貴殿ご自身は寡黙で、騒音の排除は快く受け入れられる方ですので、きっとお役に立てるものと期待しています。

敬具

ダブリュー・ビー

お伝えするのを忘れるところでしたが、この器具の改良として、私が「シーツの調べ」と名づける特殊な音色があります。これは長話やののしりや卑猥なことばなどを抑えるために用いることができます。

ティー

第229号 1711年11月22日（木曜日）

【アディソン】

サッフォーの魅力的な抒情詩は彼女の甘い欲望を留め、
私たちのうっとりとした心を愛の調べへと導く。（ホラティウス）¹⁾

いまでもローマで目にすることができる数多くの古代の作品のなかに、腕も足も首も欠

1) ホラティウス『頌詩』4.9.10-12

けた胴体だけの彫像があります。残された胴体だけからも、ミケランジェロがすべてこれから学んだのだと断言するほどのすばらしい技量があることが分かります²⁾。事実、ミケランジェロはこの像を非常に注意深く学び、彼の彫像さらには絵画の大半を、イタリア風に言いますと「とても風格のある」ものに仕立てたのです。このためこの欠けた像はいまでもミケランジェロの学校と呼ばれています。

本日のテーマに予定していますサッフォアの断章は、彫刻家や画家の間における上述の切断された像と同様に、詩人や批評家の間で大きな名声を博しています。わが国の何名かは、特にドライデン氏などは、劇作品や恋愛詩の創作において盛んにこの断章をお手本にしたように思えます。

この抒情詩ができたきっかけは何であれ、読者がこの詩が恋人の隣に座っている人物に代わって書かれたのだと考えますと、その美しさが分かってきます。この見事な原作の三種類の写しを確かめてみたいと思います。最初にカトゥルス³⁾、二番目にボワロー氏、そして最後にヴィーナス賛歌の翻訳で正当な評価を受けていますある紳士の三様の翻訳を取り上げます。

レスボスの女について

私には彼が神に思える、
それが天の定めであるなら、彼は高みにいまし、
あなたの傍らに座り、繰り返し、
あなたを見つめ、耳を傾け、
優しく笑いかけ、心からの同情を寄せ、
私の気持ちを奪い取ってしまう。
その一方、私も見つめ返す、すべてを忘れて、
意識なく口ずさむ、
舌は麻痺し、弱々しく、張りつめ、
情熱の炎に支配され、声は結び合わされ、
耳には残響が、そして、二人は夜の闇に包まれる。

学識のある読者にはこの詩が何故ローマ文字で印刷されているかその理由は十分お分かりだと思います⁴⁾。そして、この翻訳を原作と比較してみますと、最初の三連はほぼ一語一句違えずに翻訳されており、原作と同じ気品が宿っているだけでなく、ギリシアの詩に顕著な、サッフォアの抒情詩特有の表現の急転が伺えます。ダシエール夫人はサッフォアの

2) この像は、ヴァチアカン美術館にあるベルヴェデーレのトルソー（胴体だけの彫像）のことで、神格化されたヘラクレスを描いたもの。年老いて視力が落ちていたミケランジェロは、輪郭を手でなぞったということである。

3) カトゥルス『カルミナ』51 アディソンは最後の5行を省略した。

4) この行はパルテニウスの判読によった。マダム・ダシエールはこれについて詳しく述べている。

この抒情詩がロンギノスに完全な形で保存されていると言っているのですが、その理由は私には想像できません。ロンギノスの引用を調べて見ますと、私たちには伝えられていないスタンザが少なくとももうひとつあるのは明白なのですから。

私がここで引用したいと考えています第二の翻訳は、ダシエール氏のものです⁵⁾。

あなたのそばで、あなたのことを想って、
溜息がつけるのは何と幸せなことか、
喜んで話しに耳を傾け、時々優しく微笑みかける。
神々でさえ、その幸せに比肩できるだろうか。

あなたを見つめると、私の血管には鋭敏な情熱が宿り、全身に行き渡る。
そして、恍惚状態で、心は行き場を失い、
私は言葉も失ってしまう。

私の目にはぼんやりとした霞がかかり、
もう聞くこともままならず、優しい言葉に酔い、
脈は途切れ、息も絶え絶えとなり、呆然とし、
全身に戦慄が走り、震え、息絶える。

読者にはこれは翻訳というよりはむしろ模倣だと思われることでしょう。詳細に渡ってはそれほど首尾一貫して密接に関わりを持っていませんが、一行一行には原作のように熱情が伺えます。要するに、ボワロー氏はこの名高い断章の熱情のすべてとは言えないが、詩全体の雰囲気伝えてくれます。

最後に、英語訳を提供したいと思います⁶⁾。

I

幸いなるかな、彼が不死の神々のようであることは、
優しくあなたの傍らに座っている若者は、
絶えず、あなたの言うことに耳を傾け、あなたを見つめながら、
静かに話しかけ、柔和な笑みを浮かべる。

II

私は心の平静を奪われ、
胸中には激情が渦巻く。
陶然と見詰める私は、

5) ボワローによるロンギノス8章の翻訳。

6) 英訳はアンブローズ・フィリップス(1674-1749)。フィリップスは英国の詩人で代表作は『牧歌集』(1709年)。

息も絶え絶えとなり、声も失った。

Ⅲ

私の胸は高まり、名状しがたい炎が

私の全身に走った。

私のかすんだ目に闇が覆いかぶさり、

耳にはうつろな響きが木霊した。

Ⅳ

露を帯びた靄に包まれ、私の手足は冷たくなり、

私の血は物静かな戦慄に震え、

私のか弱い脈は打つことを忘れ、

私は、気を失い、倒れ、息絶えた。

ロンギノスによると、サッフォーのこの愛の描写は正確な自然の模写であり、お互いに反発しているにもかかわらず連鎖のごとく沸き起こってくる感情のこういった状況は実際に逆上した愛に見られるものだということです⁷⁾。

私はこの抒情詩を伝えた批評家も編集者も誰一人プルタルコスが語った事情について言及していないのを不思議に思っています⁸⁾。義理の母ストラトニスに恋をし、(気持ちを明かす勇気がなく) 病で寝込んだふりをした有名なアンティオコスの物語の中で、彼は私たちに医師のエラシストラトゥスがアンティオコスの病にサッフォーの作品に伺える恋の徴候を見出したのだと伝えています。恋わずらいをしている王子の部屋にストラトニスが入ってきたとき、医師にはこの徴候が見えたのです。これはサッフォーが述べた徴候と大きな違いがなかったのでしょうか。アンティオコスのこの話は非常に有名なものですので、私の現在のテーマとは関係のないこの話の結末はここでは省くことにいたします。

シー⁹⁾

第230号 1711年11月23日（金曜日）

【スティール】

他人のために善行をしているときは神々に似ている。(キケロ)¹⁾

人間というものは、光のあて方によってとても醜く見えたり、また、とても美しく見えたりします。激情に駆られたり、邪悪な下心があると、あからさまな暴力によって相互の関係をずたずたに引き裂いたり、密かな背信行為によって互いを傷つけたりすることにな

7) ロンギノス10.3

8) プルタルコス「デメトリオス伝」38

9) ウェルステッドがロンギノスの『崇高について』を翻訳した(1712年)。

1) キケロ『リガリオスについて』12.38

ります。恥ずべき悪辣な手段によって卑しく狭量な目的を追求しているのが分かるとき、あたかも交友関係の破壊が目的でもあるかのように人と交わっている姿を目にすると、私たちはその人たちと同種であることを恥ずかしく思い、人間そのものに不機嫌になってしまいます。ところが、別の光をあてて、人々に対する寛大な心遣いに溢れて、穏やかで善良で善意から、お互いの悩みに心配りをして、お互いの欲求を和らげている光景を見かけますと、彼らが同種であるとは信じられないくらいになります。この場合、彼らは崇高な力を行使し善行をする神々のように見えます。こういった慈悲の心には最大の賛辞を贈ることができます。寛大な行為を見たり聞いたりするときには、たとえ私たちがそれに全く無関係であっても、胸中に喜びが沸いてくるのを認めざるを得ません。この例を挙げるとしますと、プリニウスの書簡ほど相応しいものはないと私は考えます²⁾。その書簡でプリニウスは友人にとっても巧みに助言します。これは何百年も前のことですが、この結果を知ることは大きな喜びになるものと私には思われます。

マクシマスへ

あなたの友人の代役として、私は自信を持って私の友人を引き合いにだせると思います。アリアナス・マトリウスは国で最も重要な人物です。彼のことをそう考えるとき、私は彼の財産ではなく、彼の高潔、正義、謹厳、そして思慮分別を念頭に置いているのです。彼の助言は仕事の上で有益ですし、彼の判断は知識の習得の上で役立ちます。彼の誠実さ、真実、そして思慮はとても際立ったものです。おまけに、彼はあなたと同じくらい私に愛情を寄せてくれています。そうです。心から親愛の情を寄せてくれているのです。彼には野心はありません。彼は最高の位に上ることもできますが、低位に甘んじています。だが私は彼の役に立ち彼を昇進させる決意です。そこで、彼は期待も気づいてもいなく、拒絶するかも知れませんが、彼の名誉にさらに何か付与するものがないか考えてみたいと思っています。要するに、面倒なことではなく、彼の誉れになる何かを見つけ出したいのです。あなたのお力でもって、どうか彼のためにこの種のものを入手していただきたいものと思います。私のためだけでなく彼のためにも是非お願いしたいと思います。彼はそんなことは望んでいませんが、私には、彼があなたの好意を知れば、彼は自分が依頼したかのように感謝することが分かっているからなのです。

拝啓

現在流布しています卑屈な教育に対する貴殿のお考えを拝見していると、大望が沸いてきます³⁾。貴殿が賛意を示されますと、小生は不快とは言えないまでも極めて厄介なことに首を突っ込むことになるのではないかと気遣っています。実はわが国の若者のために、これからウェルギリウスとかホメロスの物騒な書物の楽しくかつ満ち足りた読書法を教示

2) プリニウス『書簡集』第3巻、2 プリニウス(62?-114?)はローマの著述家・行政官でその書簡は当時の上流社会の様子を伝えている。

3) 第157号、第168号参照。

しようとしているのです。

小生は英雄ではありませんので、多くの者をとはいきませんが、成功すれば何名かの若者を救うことができるでしょう。若者たちを寂しいが愉快的場所に誘おうと考えているのです。とはいえ、そこは町から遠く離れることはありません。彼らには気晴らしとなる音楽やダンスや絵画などの嗜みも必要なのですから。こういった嗜みはみだらな生徒たちが喜ぶさもしい遊びと同じくらい愉快的ことなのです。自分より階級が下の者とは交わらず、仲間内で楽しみ、ささやかな能力を褒め称えあい、ある意味で精神を鼓舞し合っているこういった人たちが、わが国の非常に洗練された著者に早くから通ずるようになるのは容易に想像できます。彼らはこのことによって書物に対するまづまづの鑑識眼を付与されますので、若いご婦人方がフランス語を喋ったり、イタリアのオペラを歌うようになったりするときのように、リリーの書物を読むよりときよりはるかに簡単に、それほど苦勞せずまた嫌がらずに、ラテン語を習熟することになります⁴⁾。彼らがそこまで進歩しますと、もっときっちりとした嗜好を形成することが可能になります。要するに、心から優れた著作を楽しめるようになった人は、自分だけでなく仲間内にとっての大きな喜びを感じながら、最も優れたローマの歴史家や詩人や雄弁家の作品に目を通し、選りすぐりの美を指摘し、年代記の概要とか地理学や勲章や天文学あるいは当時ごく自然であった好奇心などが身につくことになるのです。わずかでも才能のひらめきを備えた人は、そのひらめきが当時の賞賛に値する著述家の卓越した思想や高尚な情趣によって覚醒されますと、その素晴らしさが学問の世界全体で誇りと驚嘆でもって称えられているもっと難解な姉妹語に挑戦したくなることは間違いないものと、私は信じています⁵⁾。一方、判断力というよりも想像力を必要とするような文章を書く文体習得に向けた訓練も必須となります。また、自国語では、とりわけ紳士がしばしば注目を浴びることになる手紙の書き方の修得にすべての人が関心を払うべきだと思います。こういった生き方をする上流の気立てのよい若者たちは、ちょっとした集団を形成し、おそらく賢明な人を遊びに巻き込み、厳粛な教訓となってしまうような娯楽に引きずり込むような軽蔑すべき仲間ではないのだということを立証することになるでしょう。彼らが競って美しい詩や演説の一節を朗読したり、ある時にはテレンティウスやソフォクレスあるいはわがシェイクスピアの場面の演技に加わったりすることになるものと私は確信します。ミロの大義が再び好意的な裁判官たちを前にして申し立てられ、カエサルの恐怖が再び説かれ、アテナイのもうひとつの人種の第二のフィリッポスの野望に対する怒りが再び募ることになるかもしれません。こういった気高い気晴らしを通して、若者たちの想像力は早期に引き出され、これが日々思慮分別に昇華してゆき、無垢は美德へとつながり、未熟な善良さは高潔な愛国心へと高まってゆく姿を見るこ

4) 第221号参照。

5) さまざまな著述家（例えばロックは『教育論』で）が疑問を呈したが、ギリシア語は18世紀を通じてラテン語につぐ第二言語として、イートン、ウェストミンスターその他パブリックスクールの授業科目であった。クラーク『イングランドにおけるギリシア語学習1700-1830』（ケンブリッジ、1945年）参照。

とができるでしょう。

敬具
ティー

第231号 1711年11月24日(土曜日)

【アディソン】

おお、謙遜よ。おお、敬虔よ。(マルティアリス)¹⁾

最近小生の元に届いた寄稿者の皆さんのお手紙を拝見してしまして、非常に礼節をわきまえて書かれたつぎの手紙を見つけました²⁾。そこで、これは自分ひとりだけではなく、読者の皆さんと楽しみを分かち合いたいと考えた次第です。

拝啓

公の集まりの場のことをよくご存知の貴殿は、人前で才能を発揮せざるを得ない場合に襲われる畏怖の念にお気づきのことに相違ありません。これは一種の優雅な嘆きといったもので、率直な人にとっては免れがたいものです。従いまして貴紙で取り扱うに値するものと思われます。戦場で敵方を敗走させる勇士の多くは、自国で大勢の味方を前にして演説をするときには、気持ちが極度に混乱いたします。多数の目が一斉に一人の人物に向けられるときにはある種の魅惑的なものがあるのだと考えられます。私はある悲劇で経験不足の役者がこの気持ちにとらわれてしゃべりも身のこなしもおぼつかなかったのを見たことがあります。彼は短剣か毒入りのコップが持ち込まれる3幕までに死んでいたのだろうと思います。こういった役者は気力が回復し、生者を演じるのに相応しくなるまでは、まず、亡霊か彫像として登場しておけばうまくいくことでしょう。

このように突然茫然自失となってしまうことは気後れの現われであり、人を不愉快にさせるものではありませんが、同時にこれは観客に対するこのうえない関心を暗示しているのです。これは無言の雄弁のようなものであり、言葉以上に観客の引き立てを懇願しているのです。観客の寛大な心は、自分たちを楽しませようとして当惑しきっている役者たちを支えてあげる方向に動くのだということが分かります。私は最近オペラ『アルマハイド』でこの具体例を目にして嬉しく思いました³⁾。これは初舞台にこのうえなく不安を抱いていた若い歌い手を鼓舞するものになり、彼女の素晴らしい声と演技が存分に発揮されるこ

1) マルティアリス『警句』8.78.4

2) この手紙の筆者はヒューズ。

3) このオペラの作曲者はジョバンニ・バティスタ・ボノンチーニと考えられる。台本の作家は不明だが、ドライデンの『グラナダ征服』第2部をベースにしている。初演は1710年1月10日のヘイマーケット劇場。本号がでる直前の10日、13日、17日に上演され、バルビエ夫人がアルマンザー役を務めた。

とになったのです⁴⁾。長所の伴わない単なる恥じらいは無様であり、謙遜を伴わない長所は尊大ですが、慎み深い長所は二倍の好感をもって受け入れられ、一般に、観客全員から支持されることになるのです。

敬具

歌うことであれ喋ることであれ、謙遜という大きな圧力を意識する人は、人前で自らの利点をだしきすることは不可能です。発音の力に関してある友人と話をしていたとき、二人の話は発話器官の列挙へと展開し、雄弁家は、舌、歯、唇、鼻、口蓋およびのど笛が完全な状態でなくてはならないということになりました。そのとき、友人が最も重要なもの、つまり、前額部を忘れていたと言っていたのを思い出しました⁵⁾。

ところで、謙遜が過度に働いてしまいますと、舌は動かなくなり、その役目を果たさなくなってしまうのですが、調和の取れた謙遜は雄弁家にとって必須要件です。というわけで、修辞教師たちは生徒にこれを特称命題として助言しているのです。キケロによると、演説を始めるときに全く当惑していない雄弁家は気に入らなかったということです。そして、キケロ自身も演説を始めるときには必ず不安になったと告白しています⁶⁾。実はこれは大勢の聴衆に対して払われる一種の敬意なのであり、聴衆は必ずといっていいほど弁士に対する好意を喚起させることになります⁷⁾。わが寄稿者によると、このうえなく勇敢な人もこういった場合はしばしば小心になると言うことです。実際のところ、一般に臆病者ほど厚かましいものはいないのです。

「会議の席では弁舌さわやかで大胆だが、戦場では慎重で、剣を避けた。けちな徒党を組み口ばかり達者な主君」⁸⁾

勇猛な弁舌とひ弱な腕がウェルギリウスの述べるドランケスの姿である。ホメロスはごく稀にしか言及していませんが、小心でずうずうしい性格を備えた人物のことは、犬のまなこと小鹿の胆と表現しています⁹⁾。

道理をわきまえた謙遜は雄弁を魅力的なものにするだけでなく、その人が持っているあらゆる才能を際立たせるのです。これはそれに伴うあらゆる美德をより高尚なものにします。絵画における影のように、画像を引き立たせ色彩は輝きを増します。謙遜というもの

4) チャーマーズによると、これはバルビエ夫人。1710年の主要な女優としてはマルガリーテ・デ・レピース、イサベラ・ギラルドゥーがいるが、1711年の11月、12月にはアルマンザー役としてはバルビエ夫人一人だった。彼女は翌年5月のヒューズの『カリュプソとテレマコス』でもテレマコスを務めた。

5) ここで言う友人は手紙の筆者ジョン・ヒューズと考えられる。

6) キケロ『弁論家について』1.26.119-21

7) これはアディソン自身が人前で話すことに自信がなかったことの正当化と読むことができる。ジョンソン博士は「彼は下院で喋ることができず、政府を擁護することができなかった。」(『詩人伝』と記している。

8) ウェルギリウス『アイネーイス』2.338-9

9) ホメロス『イーリアス』1.225

がないと美德はそれほど際立ったものにはならないのです¹⁰⁾。

謙遜は装飾であるだけでなく、美德の保護者なのです。謙遜は心に芽生える一種の敏感で繊細な感情であり、危険なものからは身を引かせてくれる働きをしてくれます。これは非常に鋭敏な感覚ですので、有害なものに出くわすと避けるようにとの警告を発するのです。

今はいつどこでのことかは思い出せませんが、古代ギリシアの歴史のどこかで、女性たちが奇妙なうつ状態に陥り何名かが自殺に追い込まれたという文章を読んだことがあります¹¹⁾。元老院は、続出する自殺を防ぐために様々な手段を講じた後、どんな理由であれ自殺した女性の遺体は裸にして往来に曝し、市中を引き回すとの布告を發布しました。この布告によって、それまで続出していた自殺は見られなくなりました。この例を見ると、女性には本来しとやかさが備わっているのだということが分かります。これによって、狂気や絶望までも克服できたのです。当時は、女性が持つ恥じらいへの恐れが、死の恐怖に勝ったのです。

もし謙遜が私たちの行動に対して非常に大きな影響力を持ち、多くの場合、美德を守る堅固な防壁となるなら、無思慮な人たちを支配し、率直な振舞いを当世風でないとみなしているあの礼儀正しさほど道徳を蝕むものはほかにありません。この礼儀正しさによって、生意気な言行は育ちのよさとして奨励され、常に恥をかかないでいられるのも、己が無垢であるからではなく、破廉恥であるからなのです。

セネカは謙遜を悪徳への大きな歯止めと考え、密かにこの実践を指示しています。そして、現実には起こりえない架空の場合を想定して、謙遜の気持ちを高めるようにと助言しています¹²⁾。私たちがひとりで、大きな孤独に包まれているときは、カトーが目の前にいて、私たちの一挙手一投足を見ているのだと考えるべきだというのが、セネカの教えようとしていることなのです。要するに、この世から謙遜を追放してしまいますと、美德の半分も追放することになってしまうのです。

以上のように、美德としての謙遜について考えてきましたが、ここで間違った謙遜というものが存在していることを認めざるを得ません。これはまさしく嘲笑に値します。そして、これは上品な自信に最大の価値を置く人々にしばしば伺えます。これは理性にしたがって行動することに恥じらいを覚えるときに生じ、果たさなくてはならない義務もないがしろにしてしまいます。恥知らずな道楽者の多くは、自分のことを真面目な話で取り上げられると赤面し、敬虔な考えを述べた後で、顔を上げることはほぼ不可能です。この恥じ入った人々は、細心の注意を払って、礼儀作法を守った振舞いを忌避し、美德を表に出さないようにして、悪徳を嫌悪していないといった素振りを見せます。こういったことは自分たちの快活な気質を貶め、確実に面汚しとなると考えるのです。普段の生活でそれほど

10) ラ・ブリュイエール「謙虚と長所の関係は、ちょうど絵画における人物と影の関係だ。これによって長所は強化されるのだ。」(『人さまざま』『長所について』)。

11) プルタルコス『倫理論集』249B-D「ミレトスの女について」。

12) セネカ『書簡集』11.8-10, 25.5-6

頻繁に出くわすことはありませんが、これは人間性を無力と考えてしまう心の貧しさであり、見下げ果てた臆病さであり、墮落した卑屈な心的状態と言えます。

人格や生まれや職業、貧困やその他不運を恥ずかしく思わせるもうひとつの間違った謙遜が存在します。これらは自分では防ぎようのないもので、自分の力で矯正することはできません。いずれかの事情で嘲笑の的になっていると思われる場合、そこでうろたえてしまうと、さらにひどいことになってしまいます。そういったときこそ、高潔な気質を発揮し、完全無欠な状態を示すことで自分のせいではない欠陥を軽減するチャンスなのです。著名な著者の賢明な言い方をすれば、禿頭であったために、その弱点を月桂樹で隠したカエサル真似をすべきなのです¹³⁾。

シー

第232号 1711年11月26日（月曜日）

金品をばら撒かずに、彼は栄光を手にした。（サルスティウス）¹⁾

賢明で善良な私の友人サー・アンドリュー・フリーポートは、町と田舎をほぼ二分した暮らしをしています。町での時間は社会のためと私有財産の管理に充てられます。そんな風にして3, 4日過ごしますと、自分や家族や友人を楽しませるために、町から二、三マイル離れた田舎の屋敷に出掛けていき同じように3, 4日過ごします。このようにして、仕事と楽しみというか、サー・アンドリューによれば、労働と休息の双方を魅力的なものにしているのです。双方は非常にめまぐるしく入れ替わりますので、どちらも癖になることはありません。つまり、どちらか一方に丸々飲み込まれることはありませんし、飽き飽きすることはありません。彼はクラブではしばしば上機嫌ですが、時には、心配げな表情を浮かべることもあります。だが、田舎に引っ込みますと、彼は常に自然体であり、とても魅力的な友となります。そういう訳で、私は彼から招待されますとたいていの場合喜んで出向きます。

先日のこと、私たちが四輪軽馬車に乗り込むや否や、ドアの両側に乞食が2, 3人しがみつki、例によって家には病気の妻や夫がいるとか、三人ないし四人の小さな子供たちが寒さとひもじさで苦しんでいるとか言いながら物乞いをしてきました。私たちはそのしつこい懇願から逃れるためにいくばくかのお金を渡さざるを得ませんでした。そして、彼らの祝福と歓声を後にして馬車を進めたのでした²⁾。

13) スエトニウス『皇帝伝』1.45.2

1) サルスティウス『カティリナ戦記』54.3

2) ミッソンによると、ロンドンはとても豊かだが、乞食も沢山いるとのことである。そして、彼らは施しを求めるとき、まるでその家の主人であるかのように勢いよく家々の戸口をノックするとのことである。ミエージュもまた、ロンドンで不快なことのひとつとして、特にシティーとウェストミンスター区の街頭の乞食のしつこさを挙げている。

サー・アンドリューはつぎのように語るのです。「さてさて、乞食諸君の祈りを背にして立ち去ることにしよう。つぎの居酒屋では我々もいっぱいやろうよ。我々が自慢できることは飲食店主の商売を鼓舞し、政府の物品税に協力するぐらいのことだよ。あの貧しい連中の背中には毛織物なんて無縁なのだ。今度出会っても、彼らの衣服は少しもよくなっていないだろうさ。彼らは憐れみの対象に見えるように、いつもぼろをまとった生活をなくてはならないのだ。彼らの家族もまた彼らと変わらないとすれば、きちんとした服装なんかできないのも確かだし、食べ物もひどいに違いない。じゃがいもが主食で飲み物は水だと考えられる。こんな状態で、農家は羊毛や小麦や家畜のためにどうしたら上等な顧客を持てるのか。上等な顧客と消費が地主階級を助長し、紳士の地代を維持せざるを得ないのだよ。

ところで、生きとし生ける者の中にあって、売買を生活の糧にしている我々商人は決して乞食を激励するようなことはすべきではない。我々が輸出する商品は、実は、土地の産物なのであり、その大半は人々の労働の賜物なのだ。我々はじっとしているために彼らを雇うのだが、こういった人々の労働のどれだけを輸出することになるのか。乞食が我々から受け取る施しは無為の賃金なのだ。私は常々教区から福祉金を受け取ったり、路上でお金を貰ったりさせてはならないと考えている。自分の力で働いて暮らしていけるように仕向けなくてはならないのだ。不足分を補うためには、人々に税金を課すしか方法はない。もしこのルールが厳格に守られれば、新たな労働者が数多く誕生することになり、おそらく製品の価格も安くなるはずだ。安く買って高く売るのが商取引の常道なのだ。商人は第一次経費をできるだけ低く抑える必要がある³⁾。そうすることで、利益はより大きくなる。利益を生み出すためには、製品に掛かる労働の代価を小さくするのが一番だ。これはまた外国市場を増やす手っ取り早い方法なのだ。製品の価格を安くすれば、遠隔地への輸送費が出て来る。これは地主と商人双方にとって有益な結果をもたらすことになる。働き手の数が増えると、商人も紳士も等しく幸せな結果を持つことになるわけだ。たむろする乞食に気前よく施しをしたり、その他労働者の増加を妨げたりするようなことは、商人にも紳士にも等しく害になるのだ。」⁴⁾

サー・アンドリューは引き続き、労働者の数を増やすことで製品の価格を下げることは誰にとっても好都合なことなのだと断言しました。だが、私とその主張に少々驚いているのを認めた彼は、少し間を置いて再びつぎのように話を始めたのです。「矛盾しているように思われるかもしれないが、賃金を減額しないで労働の代価を下げるべきであって、労働者に不便をかけずに賃金を減額できるのだ。こういった事態は確実に起こりうる。労働者の賃金はあらゆる有益な物の代価の大部分をしめる。もし、賃金に比例して、あらゆる

3) 原文の out-set とは一次経費のことで、OED 初出の例としては、1719年。

4) サー・アンドリューは、当然、国の富と労働の関係については、オーソドックスなホイッグ党の考え方である。一方で、これまで通り、国の富の源泉として土地を主張するトーリー党の考え方もあった。スウィフトは、「地価によって計られていた国の富は、今では、株価の上下によって計られるようになっていく」(1710年11月2日、『イグザミネー』13)と述べている。

物の価格が安くなれば、労働者は賃金が安くなっても、生活に必要なものを必要なだけ購入することが出来るようになる。もしそうだとすれば、どこにも不便なことはありませんよね。ところで、働き手の数を増やして労働の代価を下げたものの、賃金を下げられないとなると、どうなると思うかね。これについては、賞賛に値するサー・ウィリアム・ペティが彼の著述で何回かつぎのような例を挙げている。私が記憶してところでは、時計製造の例があるが、ここでの目的に沿うように説明したいと思う⁵⁾。時計一個を一人で、百個の時計を百人でといったように作るとなると、安く作れないのは確実だ。なぜなら、時計製造にはさまざまな工程があるので、等しくすべての工程に相応しい人などはいないからだ。製造は退屈な作業となり、最終的にはできの悪いものになってしまう。だが、百個の時計を百人で担当し、ケース、文字盤、竜頭、ゼンマイ、その他工程を、それぞれその工程に相応しい職人を充てるとしたらどうだろう。職人はそれぞれいろいろな工程で悩む必要はなくなり、全員が単一の役割を手際よく迅速に成し遂げることが可能になる。その結果、職人の賃金は全員同額としながら、百個の時計を製造するのに掛かる時間は4分の1ですみ、コストも4分の1ですむ。製品の価格をさげると、需要も伸び、職人は首を切られる心配もなく、賃金も十分なものになる。これと同じことは衣類とか運送業とかその他すべての業界にも当てはまるのだ。このようにして、わが国の製造業に働き手が増えることで、製品の価格は安くなり、労働者はそれまで同じ賃金を貰え、その結果、より多くの衣食住の便に供する品物を購入することが可能になる。こうして、国家は労働者の増加から恩恵を蒙ることになるわけなのだ。

おまけに、私には乞食に慈善を施す理由が見当たらない。なぜなら、乞食は教区の住民であり、貧民を扶養していく責任は教区にあるのだから⁶⁾。私としては、この法律に心から満足しているわけではない。この法律は貧民に仕事を持たせるというよりも食べ物を与えることをよしとしているのだ。わが国には先祖が作った慣習がある。つまり、この種の法律が初めて施行されてからというもの、貧民はつぎの名高い歌によって侮辱されたのだ。「悲哀を縛り首にせよ、世話は捨ててしまえ、教区には我々を見つけ出す義務があるのだ。」⁷⁾ もし我々がとてもお人よしで働きもしない彼らを養うとなれば、まさに彼らはお返しとして我々に「愉快的乞食たち」を歌ってくれますよ。

とはいえ、私は慈善行為すべてに異を唱えているのではない。福音書に実に感動的な表現で、私たちに実践を奨励している美德があることは承知している。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである。」⁸⁾ 聖なる救い主は、貧しい人への慈善の実行とか怠慢を彼自身

5) サー・ウィリアム・ペティ『政治算術』「ロンドンの発展について」(1683年)。

6) 1662年の『貧民定住法』では、教区はよその労働者が住みついた場合には、その労働者を生まれ故郷に送還できると規定した。教区の責任は自分の教区民だけになった。当時は、時として教区の援助を受けるものは、住民の約4分の1になることがあった(トレヴェリアン)。

7) ウィリアム・チャペル『古謡』参照。

に対する義務の励行とか不履行とみなす。私は主なるイエスの御心に従いたいと思う。それゆえ、もし勤勉な人が刻苦勉励し、粗食を甘受し、教区からの救済を受けるのを恥として路上で物乞いをするとなると、これこそまさしく飢えであり、渇きであり、裸なのだ。さらに、もし誰かが迫害や抑圧から逃れようとしてやって来たなら、その人は見知らぬ人であり、招き入れるべきなのだ。もしわが同胞が不信心者の手に落ち、惨めな囚われの身になれば、これは獄に繋がれた者であって、身代金を出してやるべきだ。病人を収容する病院の場合も、元気になって働けるようになってもらうために、出来るだけ援助の手を差し伸べるべきだ。だが、怠惰な人たちを収容する救貧院には施しをするつもりはない。そういうわけで、私があの乞食たちに施しをしなかったとしても、私が非難される筋合いはないと考えているのだ。慈善を實踐できるルールを定めなくてはならない。わが国の誤った慣習に屈することはないのだ。とはいえ、怠惰な人々や見捨てられた人々がキリスト教徒の優しい心につけこんで施しを騙し取り放蕩生活をするのは、口汚くののしることよりももっと責められるべきだと思わざるを得ない。こんな人たちに施しをしても何一つ救いにはならないのだ。』⁹⁾

第233号 1711年11月27日(火曜日)

【アディソン】

まるでこのような治療が功を奏するかのように、
 狂気を癒してくれ、苦痛を取り除いてくれ、
 愛の神の同情が寄せられるかのように。(ウエルギリウス)¹⁾

本日の紙面では、ギリシアの手稿の翻訳を若干紹介して、みなさんへの約束を果たしたいと思います²⁾。この手稿はレフカーテ岬にあるアポロ神殿に保存されていた記録の一部だったと言われているものです。これは恋人飛び込み岬にかかわる短い物語で、そこには「第46回オリンピックのときに、アポロの子ピューティアー神殿で誓いを立て、恋の病を癒すためにレフカーテ岬からイオニア海に身投げした男女の話」と刻まれています。

この話は大半がとても無味乾燥なものであり、身投げをした恋人の名前とかその相手は誰であったかとか、身投げによって治癒したか死亡したかそれとも大怪我に終わったかなどの説明が簡単に記されているだけです。事実、そこにはあまりにも大勢の死者の名前が登場しますので、もし詳細に翻訳しますと、まるで死の目録を見せられるようなことにな

8) 『マタイによる福音書』第25章42-43。この箇所の訳は、日本聖書教会発行の「聖書」(1964年)による。

9) 本号の筆者は不明。ニコルスその他の編集者はヒューズだと考えているが、一方で、ニコルスはテーマからするとヘンリー・マーティンの可能性も高いと考えている。その他、グレゴリー・スミスやエイトキンもヘンリー・マーティンと推定しているが、明白な証拠はあがっていない。

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』10.60-61

2) 第227号参照。

ってしまうことでしょう。そこで、要約をするに留め、特異なケースだけ取り上げたいと考えます。以下の通りです。

バトゥス：シシリアのメナクラスの息子，楽士ボンビカのために飛び込む。右手足を失うことで熱は失せる。

メリッサ：ダフニスへの恋，大変な打撲傷を負うが命は助かる。

キニスカ：エスキネスの妻，リクスへの恋，一方，夫エスキネスはエウリアを恋する（というわけで数年間非常に危うい結婚生活を送っていた）。二人は同意の上，共に身投げをする。二人とも命は助かり，その後幸福な生活を送る。

ラリッサ：テッサリアの娘，プレクシプスと3年間の求愛期間を送るが見捨てられる。岬の突端に立ち，指輪やブレスレットや絵やその他プレクシプスから贈られたプレゼントを投げ落として，自らも身を投げたが，命は助かる。

〔注〕ラリッサは身投げ前に，アポロ神殿に銀のキューピッドを捧げる。

シマイタ：ミンダスのダフニスに恋する。身投げで死亡。

カリクサス：サッフォーの弟，情婦ロドピに恋する。彼女のために全財産を使い果たす。当初姉から身投げするようにとの助言をされるが，一文無しになるまで聞く耳を持たず。ロドピに捨てられ，最終的には身投げして，死亡。

アリダイオス：エペイロスのハンサムな青年。テスピスの妻ブラクシノエに恋する。前歯2本が抜け，鼻が少々へこんだだけで大した傷も受けず。

クレオラ：エフェソスの寡婦。夫の死を悲嘆して身投げ。夫への思い出を断ち切るために決意する。だが，岬に着いて，ミレティスのディマカスと出会う。彼と少し話をしているうちに，身投げをやめる心持になり，アポロ神殿にて彼と結婚する。

〔注〕彼女の喪服は今でも神殿の西の端に掛かっている。

オルフィス：漁師。前日，テストイリスに耳を殴られ，彼女と暮らしていけないと考え，身投げする。命は助かる。

アタランタ：オールドミス。彼女の残酷な言動によって数年間で絶望した恋人2，3人が身投げ。今や55歳になった彼女はスパルタの役人に恋をし，身投げして首の骨を折る。

ヒパルカス：妻を溺愛。妻はバティラスに惚れ込む。彼は身投げして死亡。妻は色男と再婚。

テティクス：ダンス教師，アテナイの既婚婦人オリンピアに恋する。大層軽やかに身投げし，足が使えなくなる。

ディアゴラス：金貸し。料理女に恋する。断崖から何度か下を見るが，怖気づいて引き返し，その夜，彼女と結婚する。

キナイドス：ピューティアで記帳するが，相手の名前を尋ねられ，それが発覚するのを恥じて黙ると無視される。身投げも諦める。

エウニカ：パボスのお手伝いで，年齢は19歳。エウリバテスに恋する。身投げで怪我をするが回復³⁾。

〔注〕これは二度目の身投げ。

ヘスペラス：テレントウムの若者。主人の娘に恋する。船が近くにいなかったため溺死。

サッフォー：レスボスの女、パオーンに恋する。アポロ神殿にやって来、花嫁のような純白の衣装をまとう。頭にはキンバイカの花冠を置き、自ら考案した小さな楽器を手にする。アポロ賛歌を歌った後、祭壇の一方に花冠、もう一方に豎琴を掛ける。そして、スパルタの乙女のごとく衣服をたくし上げ、身の安全を願って、救出の祈りを捧げている数多くの見物人を前にして、岬の頂まで颯爽と歩む。頂の上で、耳には届かないが、自作の詩を読み上げた後、それまで見たこともないほど大胆に身を翻す。目撃した多くの人たちは海中深く沈んでいき二度と浮かび上がることはなかったと語る。だが、中には、海底には届かず、落下中に白鳥に変身し、空中をその姿で舞っているのを目にしたと主張する者もいる。彼女の衣装の白さとはためきが見ている人たちにそう映ったのか、それとも、実際に音楽的で哀愁を秘めた白鳥に変身したのか、レスボスの人々の間では今でも謎は解けていない。

アルカイオス：著名な抒情詩人。いつとき、サッフォーに激しく恋をする。彼女のために身投げを決意して岬に到着するが、サッフォーが身投げした直後の夜のことであった。サッフォーの身投げを耳にした彼は、彼女の遺体を捜すがどこにも見当たらず。彼はこれを基にして第125番目の頌歌を書いたといわれる⁴⁾。

このオリンピア紀での身投げ総数は250（内訳：男124，女126）。その内治癒したものの総数は120（内訳：男51，女69）。

第234号 1711年11月27日（火曜日）

【スティーラー】

私たちの友情関係におけるこの過ちが功を奏して
くればよいのにと願う。(ホラティウス)¹⁾

ある話を面白おかしく聞いた後で、洒落の部分はなくし、それだけに真実の部分のみを出す調子で、その話を再び人に話して聞かせるといったことはよくあることです。お門違いではありますが、この種の真実にはどこか愛すべき点があります。なぜなら、たとえ取るに足らない場合であっても、真実を愛するという気持ちがあるからなのです。かりにこういった誠実な修正が愛想のいい仲間を約束してくれないにしても、これは心からの味方となります。このため、事実はどうであれ、危害がない程度に仲間入りをするときには、これに時間をたっぷり費やすべきです。傲慢とひけらかしから発せられる嘘は、自衛のためにこれを見抜く必要があります。なぜなら、こんなことで凱歌を上げさせてはならないからです。悪意から発せられる嘘の場合は、自らのためにもまたほかの人たちのため

3) エウニカはサッフォーの弟子の一人で、サラミスの女性。

4) アルカイオスは125番では何も歌っていないが、124番にサッフォーのことを2行記している。

1) ホラティウス『諷刺詩』1.3.41

にもこれをすっぱ抜かなくてはなりません。なぜなら、誰もが共通の敵に立ち向かう必要があるからです。だが、多くの人が取り上げているおせっかいな嘘は大目に見る必要があります。なぜなら、これはある人のためになることであり、誰も傷つくことはないからです²⁾。アテナイが打ち負かされた戦いから猛スピードで引き返し、完全な勝利を収めたと告げ、全市を喜びと歓喜に包んだ男は、執政官たちから虚言を非難されたのです。だが、この男は「アテナイの人々よ、あなたたちに幸せな2日間を与えた私はあなたたちの敵なのか」と弁明したのです³⁾。この人物の行ったことは、私の知人がいつも特定の人たちに対して行っていることと同じことなのです。私の知人はいつも人々を上機嫌にさせています。プラトンが言ったように、医師が患者を元気づけるために嘘をつくことは許されることなのです⁴⁾。私の友人の振舞いは、医師の場合と比べてみると、許されることなのかどうか幾分疑いを抱いています。彼のやり方は相手の快活な顔色を見て驚き、自信なさそうに自分の考えを述べるのです。これが、たいていの場合、嘘を真実にしてしまうわけです。彼はまるで自分は何も知らないかのように、互いに不和であることを承知の上で、その片方に向かって、相手の名前をあげて某氏はどうしていつものようにあなたのことを心から褒めないのでしょうかと尋ねるのです。彼はつぎのように話を続けます。実際、彼は私ならイングランドのほかの誰よりもあの人物を敵ではなく友にしたいだろうと語ったのです。これはあからさまな冷やかさを期待していた相手の心をつかみます。これがうまく行くのを見ると、彼はもう一方のほうに行き、自分にはお互いにほとんど相手のことを知らない人がいるなんて想像がつかないと言います。いいですか、あなたはほかの誰よりもあなたのことをよく言っている人のことをとても冷たくしたのですよ、と付け加えたのです。こういったことがひとつうまく行くと、つぎの機会には、不和になっていた一方が相手方のことを密かに探ります。そして、公道で出会うと相手に対して口ごもります。そして、彼らはつぎの居酒屋では1本あけるに違いありません。これは相手の視線を避けるやり方なのです。彼は別人から推奨されている美人のことを口にするでしょう。それどころか、彼は彼女が彼の話しかける女性に事細かに彼女自身が賞賛されているその理由を語るでしょう。友人の受け売りの尽力で町中に想像し得る実に愉快的混乱が生じるのです。半年間不在にしていた帰って来ると、訪問を受けることになり、一日おきくらいに互いに罵り合うことになります。彼らはあまりにも長期間に渡って交わりがなかったことを嘆き悲しみ、双方がいかにともしがたい義務不履行者だと訴えます。相手がお人好しで彼女のことを許せるとしてもそうなってしまいます。彼女には相手の善良さを期待する以外には何の理屈も成り立たないのですから。往々にして、毒づく連中が何人かいると、喧嘩の最後に言ったことを正常に戻すのは並大抵のことではありません。彼らを取り巻いている人々は怒りや妬みや中傷や悪意ではなく、実に愉快的気持ちにさせられるのです。

2) 「おせっかいな嘘」は17世紀によく用いられた表現。

3) プルタルコス「デメトリオス伝」11

4) プラトンはしばしば薬物の一種としての嘘について語っている。ステイールはおそらく、クセノフォンの「覚書」を思い出しているのだろう。

嘘について観察していて気づいた最悪のものは、中傷をご機嫌取りにすり替えてしまうものです。こんな嘘をつく人物は世渡りに長けていて、人の実態を観察し、人が考えていることを基礎にして自らの手練手管を駆使するのです。このため、互いに態度のよそよしい二人連れがやって来て、二人の絆が脆弱に思えると、彼は新たに誰かが現れるまでに悪意の残滓はすべて取り除いてやります。そして、二人は新たな誤解によってすっかり和解するのです。

観察者殿

デボンシャー、1711年11月14日

陽気な紳士が召使一人とガイドとして当地の人物一人を引き連れて当地にやって来たのは二日前のことでした。村の人たちはこの紳士がどこから来たのか、また、どんな人物なのか知りたがりました。とても近づきやすいと思われて、みなから尋ねられたこの同郷の士は、紳士がこの地域の服装などの流行がどうなっているか見聞するためにロンドンからやって来たということ、聞いているところでは、この紳士が自由思想家だというくらいしか承知していませんでした⁵⁾。彼には自由思想というものがどのような信仰なのか分かりませんでした。彼の口ぶりから自由思想家は異教徒とほぼ変わりはありませんでした。ただ、彼にとってはこの紳士はいい人で、約束したことに加えて、一日2回お酒にありつけるとのことでした。

私としてはこういった天真爛漫さを目にしても不思議には思いませんが、ご迷惑でしょうがいくつかお尋ねしたいと思います。わが国の素晴らしい機知と知性を備えた若者には笑うに足る根拠をもっているのだと考えます。グレート・ブリテンの郷土がすべて自由思想家というものがどういうものか知っておく必要はありません。だが、この思い上がった肩書きを自慢する自由思想家はこれが意味することをもっときっちり知っておいて欲しいと考えます。彼らが心から自由思想家と思い込んでいるのは、ひとえに、自分が無神論者つまり不信心者であるという一点からに過ぎません。現在わが国に広まっている「才人」という種族ほど卑しく、卑屈で、頑迷な人種はこれまで存在しなかったのではないのでしょうか。彼らが自由思想家を気取っていることは、放蕩者が放蕩者で、不作法者が自由人でなくてはならないと同様です。つまり、彼らは自由気ままに考えることができますし、思いつくまま勝手な空想に身を委ねることができます。言動と同じようにでたらめな想いに耽り、彼らの機知が礼儀正さとか常識といった堅苦しいことに左右されるのを嫌がりません。それゆえ、彼らは推論とか首尾一貫性とかその他理性のルールはすべて、教養人にとっては堅苦しく個性のないものとしてさげすむのです。

彼らの著作とか私自身の観察したところから学んだ限りでは、これがわが国の自由思想

5) ここで言われている人物はおそらくトランド氏のことで、イグザミナーによれば、この人物はタトラーやスペクテイターで物笑いの的にされたとのことである。アディソンの喜劇『ドラマー』1幕1場で、ティンゼルはトルーマン夫人とアビゲイルに「無神論者」という言葉は時代遅れなのだ、自分は「自由思想家」なのだと説明する。

家の実像なのです。この手紙を書かせることになったこの紳士は、私がまだ知らない新しい常識というものも持参したのですが、残念ながら、それが観察者殿に知っていただく価値があるものかどうか情報は入っていません。その情報が入るまでは、さしあたり貴殿がこのテーマについて検討され、わが国の有望な若者たちに放縦は自由ではないのだということ、もしこの逆説が理解されないとする、無神論への先入観は公平ではないのだということをお知らせいただけますと、大いに人々のためになるものと確信する次第です。

フィロウナウス

第235号 1711年11月29日（木曜日）

【アディソン】

平土間の騒々しい観客たちを静める。(ホラティウス)¹⁾

観客の領分では、公共の見世物とか気晴らしほど参考になるものはほかにはありません。劇場で上演される優美な楽しみと張り合える人はいないので、劇場に集まった数多くの洗練された人たちに目立ついろいろなことに関心を寄せることは特に自分に課せられた義務だと考えます。

ここ何年か前から、舞台上の演技に満足すると、劇場に響き渡るように長いすや羽目板を激しく叩いて賞賛の気持ちを表現する人物が天上栈敷に陣取っているのです。この人物は通称天上栈敷のパイプメーカーという名で知られています。彼が叩く音がこの職人の作業場で聞こえてくる音に似ているためなのか、それとも、実際にパイプメーカーであり、一日の仕事が終わったあとくつろぐために槌を手にしたままこういった公共の気晴らしの場にやって来ているためなのか、私には分かりません。私が承知しているところでは、愚かにもこれは天上栈敷に出没し、時々、この奇妙な音を出している亡霊だと考える人たちが何名かいます。そう考える根拠の一つに、ハムレットの亡霊が登場するたびに、音が普段よりは大きくなるということが挙げられます。また、この人物は口が利けず見聞きしたことに夢中になると、こうやって自己表現をするのだと言う人たちもいます。さらに、劇場の雷鳴役で、屋上での仕事がないときには天上栈敷でこうやって努力しているのだと言う人もいます²⁾。

この一件に関して可能な限り最上の情報を手にしてみますと、この通称パイプメーカーは、誰も知らない大柄の色の黒い人物であることが分かります。彼はたいていの場合大きなオークの木にもたれかかり、舞台に注目します。彼は笑うことはありませんが、気に入った台詞が耳に入りますと、両手でその棍棒を持ち上げ、とても激しく隣の木材の上に置きます。その後、再び元の姿勢に戻り気持ちを鎮めます。この繰り返しをするわけです。

1) ホラティウス『詩の技法』81-82

2) 雷鳴を轟かすという方法については、デニスが『アッピウスとヴァージニア』（1709年）で採用した。アレキサンダー・ポープ『愚人列伝』2.218参照。

彼が音を出すタイミングは実に素晴らしく、賢明な批評家でもそれに異議を唱えることはできません。詩人の優れた考えが表現されたり、役者の洗練された演技が見られたりするとその瞬間に、長いすや羽目板を叩くのです。観客が彼に乗ってこない、もう一度叩きます。それでも気がつかないと、憤慨して周囲を見回し、さらにもう一回叩きます。ここで必ず拍手が起こります。彼は時々最初のうちは観客に拍手させますが、その締めくくりとして、ただの一回バシと叩いてその追認をします。

劇場にとって彼はとても有益な人ですので、ある元演出家は、彼が病気で劇場に来ることができないときには、病気が治癒するまで彼の代役を雇ったとのこと。ところが、雇った人物は、激しく音を出すことはできたが、叩くタイミングがずれてしまい、観客は昔馴染みのパイプメーカーではないことにすぐ気づいたのでした。

今シーズンはまだいつもの活躍が見られないとのこと。彼は時々オペラに姿を見せ、ニコリーニの初演の時には、あまりにも激しく喝采したために長いすを3本壊したそうです。ドゲットの時にはオークの木を6本台無しにしましたし、シェイクスピアの悲劇が終わって立ち去ると、羽目板は完全に粉々になっているのです³⁾。

役者たちは彼の乱暴な喝采を見て見ぬふりをするだけでなく、彼がどれほどの損壊を与えようとも、自分たちで快く修理するのです。彼らはかつて彼の打撃音をもっと深みがあり柔らかなものにするために、木製の鉄床と反響板をこしらえようと考えたことがありました。ところが、これはティンパニーの音と区別がつかなく恐れがあったため、計画は断念しました。

一方、観客の注意を喚起させ、喝采のタイミングを知らせるために、合唱団の指揮者のように、ある人物が頭上に陣取るとは、観客にとってとても有益だと考えざるを得ません。私なりの喩えを持ち出しますと、天上栈敷のパイプメーカーは、山頂に住み、王笏を振ると嵐を巻き起こし、巨大な洞窟を大混乱させてしまうウェルギリウスに登場する風の神アイオロスのように思えることもあるのです⁴⁾。

パイプメーカーが数多くの優れた芝居を救ったのは確かです。そしてまた、彼の存在がなければ、関心を持たれることがなかった数多くの役者を有名にしたのも確かです。観客は、もし天上栈敷のこの人物が拍手をしないときに、うっかり拍手してしまうと大いにきまりの悪い思いをするのははっきりしています。役者のほうもそういった拍手は自慢にならず、オークの木の音がない場合には、単なる虚勢つまり空虚な騒音とみなします。時々お粗末な詩人とかひどい役者から賄賂を貰っているのだと、パイプメーカーのことを目の敵にする人たちがいるのは承知しています。だが、これは根拠のない憶測に過ぎません。

3) トマス・ドゲット (c.1660-1721) はアイルランドの役者で、1691年以降はロンドンで活動。コリー・シバー、ロバート・ウィルクスとドゥルーリー・レイン劇場を共同経営した。1711年秋に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演されたシェイクスピアの悲劇は、『マクベス』(10月20日)、『ハムレット』(10初27日)、『アテネのタイモン』(10月30日)、『リア王』(11月10日)、『オセロ』(11月27日)であった。

4) ウェルギリウス『アイネーイス』1.52

彼の打撃は常に公平であり、彼の警告は時宜を得たものです。彼はでたらめに打ち鳴らすことはなく、常に正確にポイントをついているのです。彼が叩く言葉に言い表すことができないほどの力強さを耳にすれば、彼が信念を持ってそうしているのは明らかです。優れた著者への彼の熱意は実に常軌を逸脱したものであり、彼の周囲にある柵も間仕切りも板もすべて壊してしまうほどです。

私としましては、わが同胞のためになることを何もなく、不毛な思索とか単なる事実の報告に終わらせたくありませんので、失礼をも省みずささやかな提案をさせていただきたいと考えます。提案とはつぎのようなことです。パイプメーカーが亡くなれるとか、病氣や加齢や無気力などから腕の力がなくなってしまう場合に備えて、誰か有能な批評家をこのポストに就けて、生活していくのに十分な手当てをだしてあげるべきではないかということです。そして、オペラ用には竹を、喜劇用にはクラブアップルの棍棒を、悲劇用にはオークの木を公共の費用で備え付けたらどうか考えます。この席は功績のある人のためのものですので、この席を占める人は音にしても腕力にしてもなるほどと思わせる根拠を示せる人でないといけません。また、牛を殴り倒せるかホラティウスの「詩の技法」について論評の書ける人でないと駄目です。要するに、この席を占める人はヘラクレスとアポロの能力を併せ持っており、後世の人たちからパイプメーカーがいなくても寂しいと思わせないような資格を持っている必要があるわけです。